

国史跡 盛岡城跡—第41次調査(本丸南東部)—

1 盛岡城跡の概要

(1) 盛岡城の概要

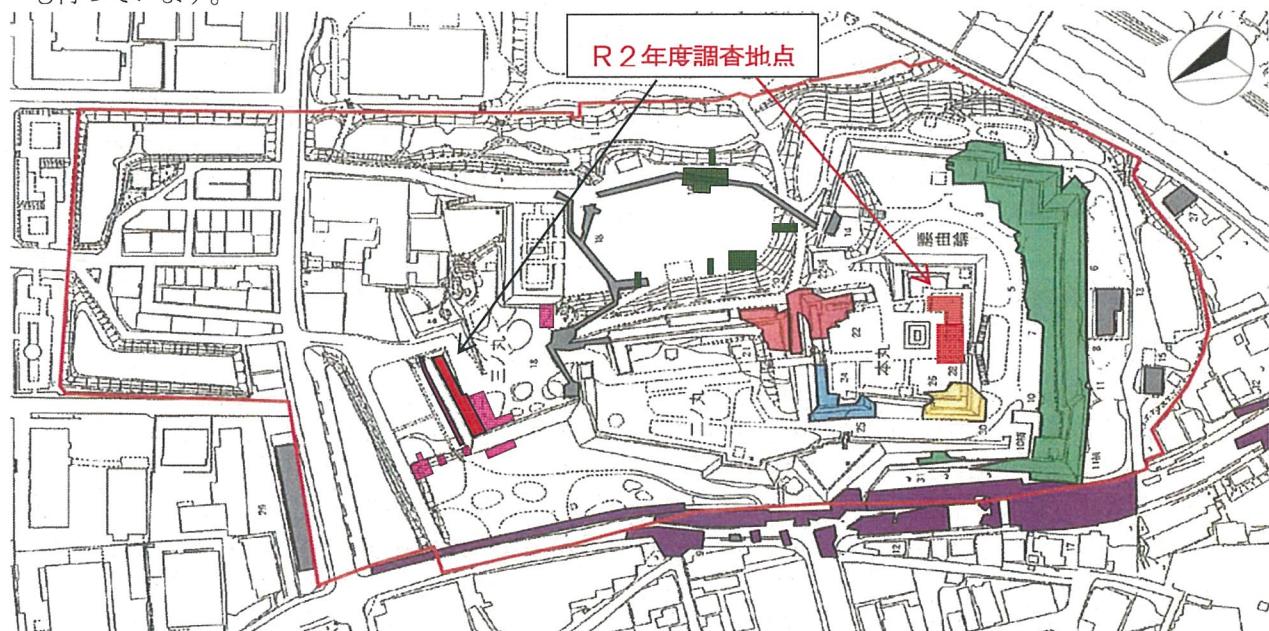
盛岡城は、旧北上川と中津川の合流点の丘陵地を利用して築かれた平山城です。初代盛岡藩主南部信直と2代藩主利直親子によって、慶長3(1598)年から本格的な築城が開始されました。大方の完成を見た寛永10(1633)年に3代藩主南部重直が入城して以降は盛岡藩庁となり、南部氏の居城となりました。

明治維新後、盛岡城は兵部省を経て陸軍省の所管となり、城内建物の保存も検討されましたが、荒廃が進み維持が困難なことから、明治7(1874)年に民間に払い下げとなり、台所屋敷を除く大半の建物が取り払われました。明治36(1903)年に至り、公園整備の計画が進められ、明治39(1906)年に広く県民に供するためとして、「岩手公園」の名称で開園しました。

往時を偲ばせる石垣が良好に残されていたことから、昭和12(1937)年に国の史跡に指定されています。

(2) 発掘調査の経過

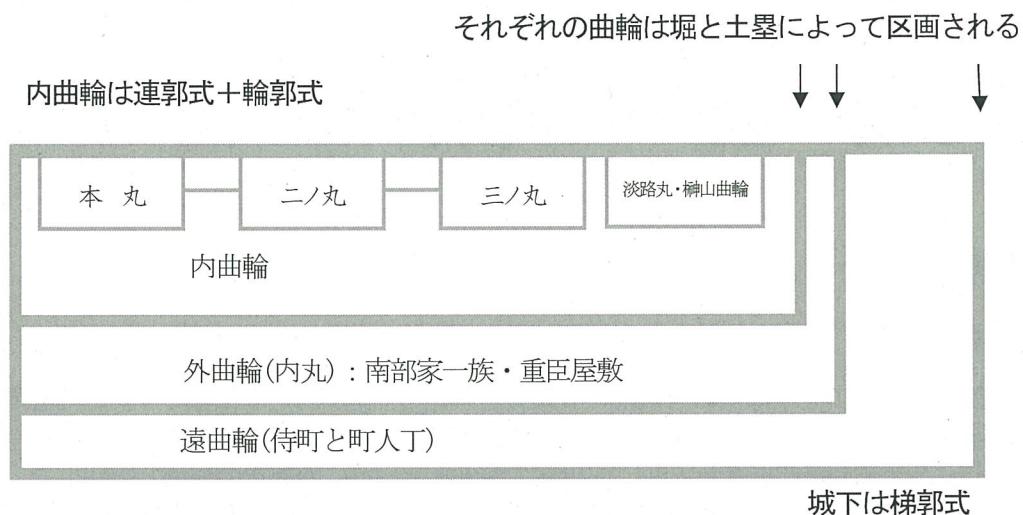
築城以来、422年の風雪に耐えた石垣ですが、江戸時代には頻繁に行われていた修復が、明治期以降には主だった修復が行われてこなかったこともあり、昭和期以降に緩みや孕みなどの傷みが目立ちはじめ、崩落の恐れも心配される箇所も出てきました。史跡の管理団体である盛岡市では、「史跡盛岡城跡整備基本計画」を策定し、崩落の恐れのある箇所の解体修復計画を策定して、修理に伴う発掘調査を昭和59年度から実施しています。また、石垣だけでなく、文化財(史跡)の正しい理解のために台所屋敷や本丸などの発掘調査も行っています。



史跡盛岡城跡の全体と発掘調査の場所

■ 本丸北東・二ノ丸南東(H5~6)	■ 淡路丸(S59~H2)
■ 本丸北西(H8)	■ 本丸南西(H10~12)
■ 三ノ丸北西・南東(H25~)	■ 台所(H28~)
■ 都市計画道路拡幅(S62~H1)	■ 確認調査等

【概念図】



- ①北上川と中津川の合流点に接した丘陵部に築城(平山城)されている。
- ②本丸がある内曲輪(城内)を要とし、外曲輪、遠曲輪(総構)の順に扇形に配置(梯郭式)される。
- ③曲輪のそれぞれが堀と土塁で区画される。
- ④内曲輪は、本丸・二ノ丸・三ノ丸・淡路丸・榊山稻荷曲輪が段下がりで連なっている。

2 盛岡城の本丸

(1) 基本的構造

本丸は城内で最も標高(約 143m)が高く、周囲の眺望が開けた位置にあります。南北 70m、東西 67m の本丸全域に登城坂と百足橋を加えた面積は約 4,556 m²で、北側は「掘切」を挟んで二ノ丸に面し、東・南・西方は、本丸との比高 6~7m 低地となる淡路丸に囲まれています。本丸の各隅には櫓台があり、かつては北東に「隅櫓」、北西に「小納戸櫓」、南西に「二階櫓」、そして南東隅に「天守櫓(過去の施設名は三階櫓)・「三重矢倉」)が存在しました。本丸の平坦面には、ほぼ隙間無く二階若しくは三階建ての「本丸御殿」の建物が建ち、本丸への出入りは、二ノ丸との間に「廊下橋」、東側に「本丸門(末御門)」がありました。

これまでの発掘調査の成果から、築城当初の本丸は、南東隅を除く、全ての隅部分が現在の位置よりも内側に存在し、規模の小さい本丸であったことが判明しています。

(2) 石垣

本丸の石垣は、盛岡城内の様々な積み方が随所に見ることができます。このことは、ほかの曲輪に比べて、規模の改造が行われ、維持のための修復が頻繁に行われ、ていたことを表しています。

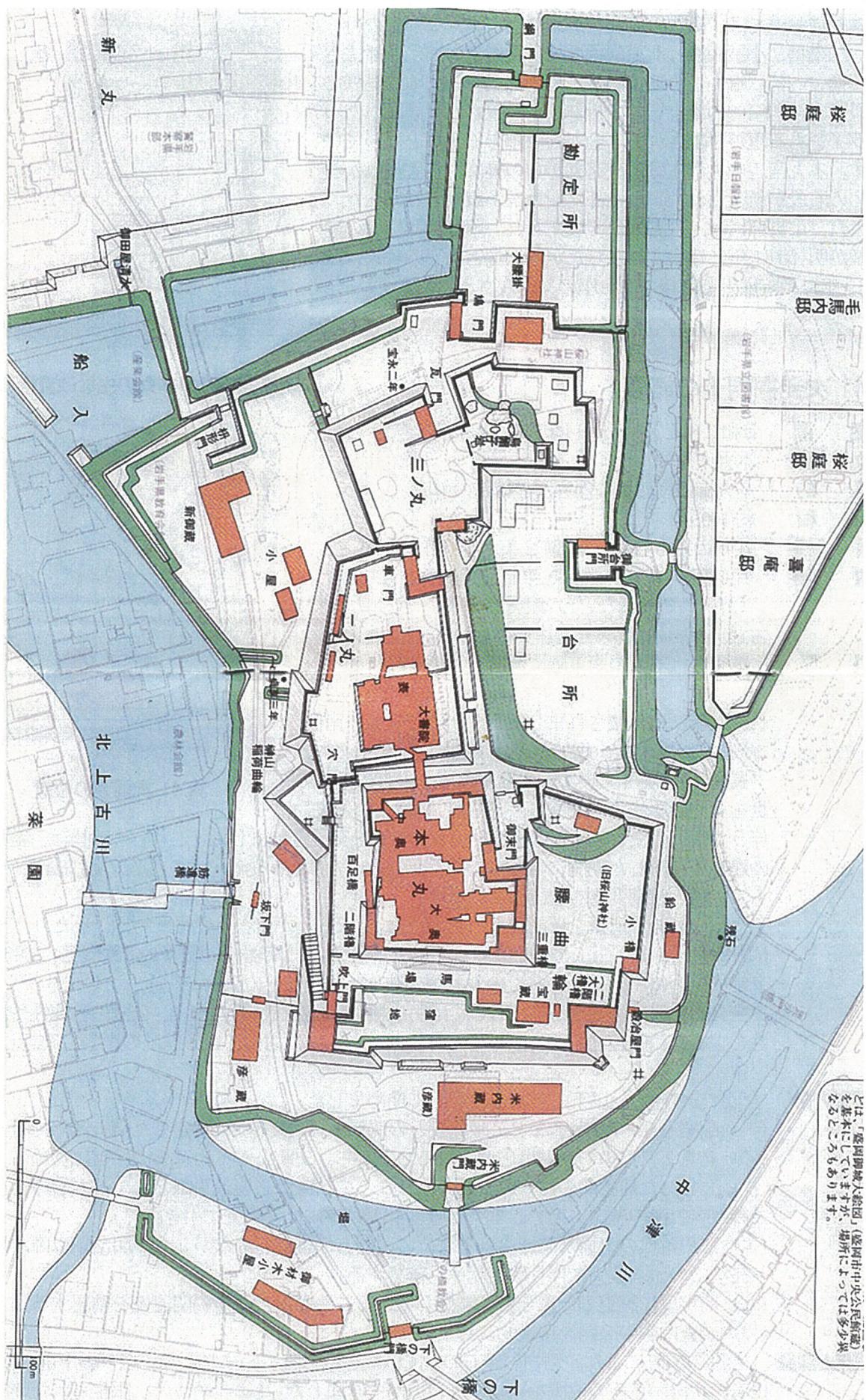
本丸東面の石垣は、割石を使った乱積み(盛岡城 2 期)ですが、中央部付近に自然面を残す野面石が多く用されており、築城当初(盛岡城 1 期)の石垣が残っている箇所です。本丸門を境に北東～北西部は矢(割)穴の大きな割石を使った乱積み(盛岡城 2 期)が続きます。本丸の西面は中央部が入角となり、北西・南西部が突出する形となっています。

北西部は乱積みですが、西面中央部から南西部にかけては目地の通った布積み(盛岡城 4 期)となっています。本丸の南面は南西隅が布積みですが、この中央から東面は全て乱積み(盛岡城 2 期)となります。

明治期に構築された石段に隠れていますが、石垣の高さの 1/3 より下は野面石が多用されており、この箇所も築城当初の石垣が残っています。

(3) 本丸の改変箇所

盛岡城は、岩手県が公園整備を計画し、明治 39 年に「岩手公園」として開園しますが、随所に改変された場所を見るすることができます。

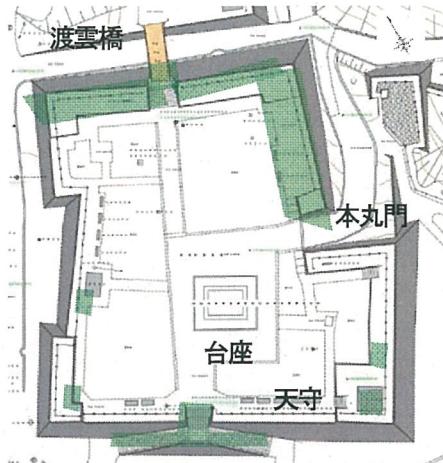


盛岡城内曲輪の概略

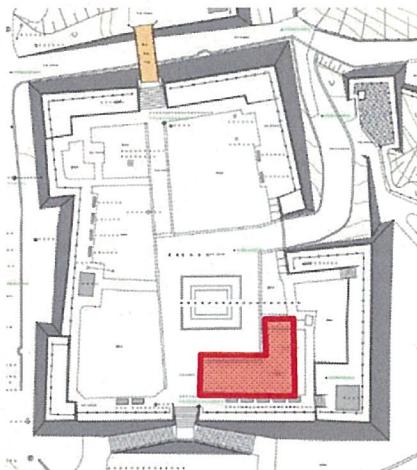
どは、「盛岡御城大絵図」(盛岡市中央公民館蔵)を基本にしていますが、場所によっては多少異なるところもあります。

本丸においては、南側の石土居が取り崩され、天守台の付櫓、二階櫓、小納戸櫓、北東隅櫓の櫓台突出部の石垣が撤去され、櫓台内部に喰いこむ形で石段が設けられています。同様の石段は本丸門南側の石土居の曲折部にも設置され、屈曲した石垣ラインも石垣が付加されて、全て同じ幅の石土居となっています。本丸南辺中央部には、淡路丸からの昇降に便宜をはかるための石段が新設され、石垣上部に開口部が設けされました。

また、中央部には、日露戦争で戦死した、南部利洋中尉の騎馬像が明治41年に建立されました。銅像と周囲の鉄鎖は昭和19年に戦時供出し、今では台座のみが残されています。



明治期以降の本丸の主な改変箇所



第41次調査の位置

3 第41次発掘調査の概要

- (1) 期間 令和2年7月29日～同年10月30日(予定)
- (2) 位置 本丸南東部
- (3) 目的 本丸御殿南西部の内容及び構造の解明
- (4) 面積 約160 m²
- (5) 遺構 建物の掘方59口、溝跡2条、土坑6基など
- (6) 遺物 瓦(軒丸・軒平・丸瓦・平瓦)、陶磁器、鉄製品
(釘・鉄瓶の蓋など)、銅製品(煙管・縁金具など)、古銭、石製品(数珠玉・墓石など)、祭祀関連遺物
- (7) 概要 調査区は本丸の南東隅に位置し、藩政時代の「天守」の西側にあたります。盛岡城の建物は、明治7(1874)年に取り壊されました。かつて本丸の南側に所在した「大奥」(南部家の私的居住区域)のうち、「長局」(中奥や大奥での生活や仕事など身の回りの世を女性が居住する部屋)や「湯殿」(風呂)など建物に伴う「礎石」やその基礎地業の「根石」などを発見されました。これらの遺構は、盛岡城の建物が存続した期間に数度の増改築が行われた痕跡が認められ、現況の調査面だけでも、数度の時期変遷を確認しています。

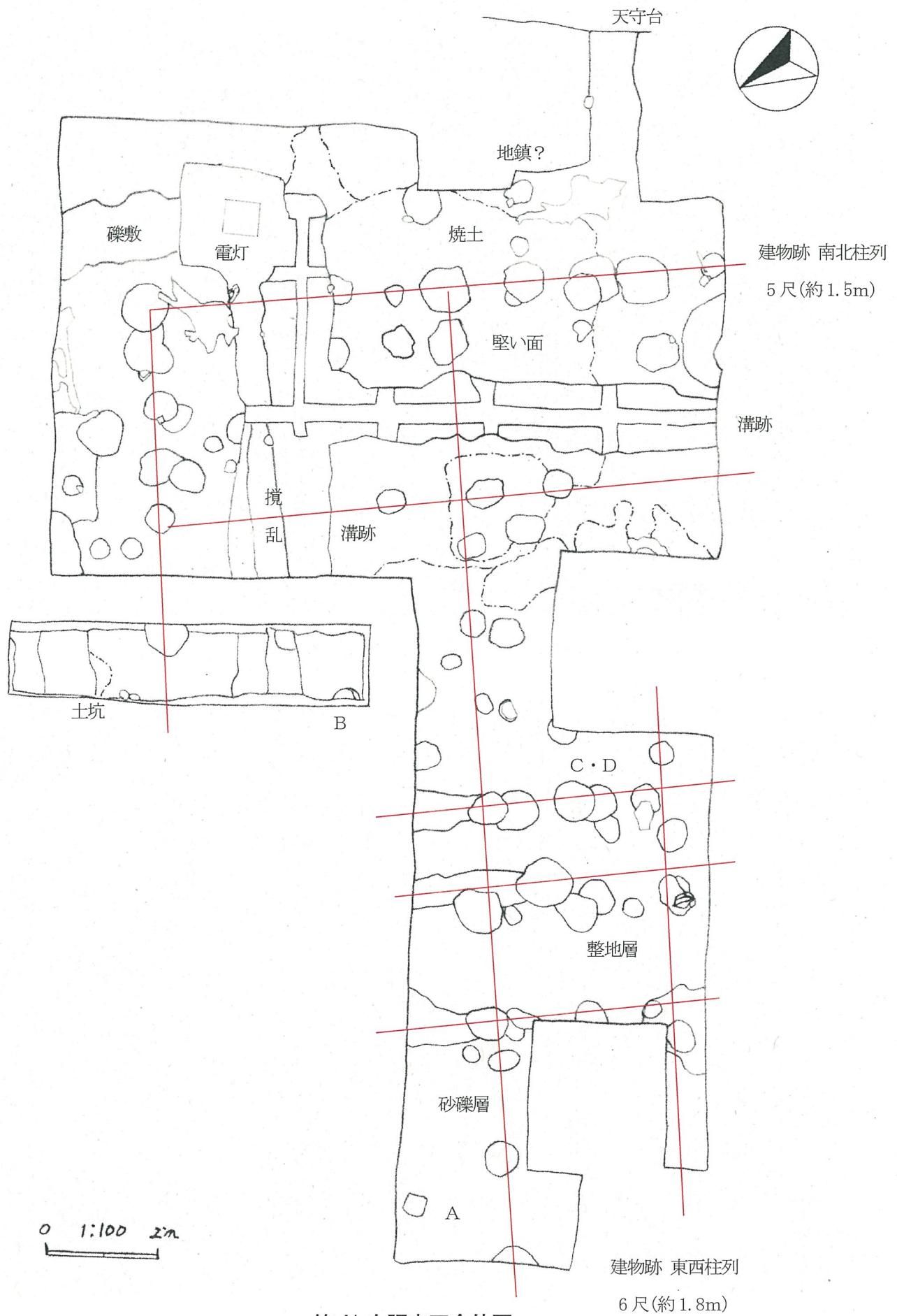
今回の調査で遺構を確認を行った層位は、「天守」が存在した最終時期にあたり、天守に葺かれていた「瓦」や祭祀儀礼の際に埋納された「陶器」・「磁器」・「鉄製品」のほか、日常の生活に用いられた多くの食器類の破片、古銭などの遺物が出土しています。

発見した遺構は建物解体、もしくは明治期以降、現在に至るまで、公園の利便性や快適性を求める公園整備の際に削平や電灯設置、さらには樹根による搅乱の影響も確認しています。

- (8) 調査方針 今回の調査は、以下の項目に留意して進めました。

- (ア) 園路・ベンチ・樹木など公園施設との関係から、縁石内の限定した調査区内で行う。
- (イ) 発見した遺構の完掘は破壊となることから、史跡としての遺構の保存に努める。
- (ウ) 発見した建物跡の柱穴跡の断ち割りなどの精査は必要最小限とし、基本層序と遺構の残存状況の確認に努め、本丸の整備計画策定に伴う調査に引き継ぐ。
- (エ) 江戸時代の遺構が確認される層位の確認と保護に努めながらも、明治期以降から現在までの公園整備に伴う改変状態も確認する。
- (オ) 前年度に調査した天守台に隣接していることから、遺構の関連性を確認する。
- (カ) 調査内容の公開を積極的に行う。

- (9) 成果と課題 今回の調査により、建物の礎石の多くは抜き取られていましたが、根石の下部に残る根石の状況からその位置を確認することができました。しかしながら、限定された範囲で行い、原則として江戸時代末期の生活面より下層の精査は行っていません。発見した遺構と変遷が認められる建物の関係については、整理しながら明らかにしていきます。



第41次調査区全体図



第41次調査区東側の全景(北から)



第41次調査区西側の全景(西から)



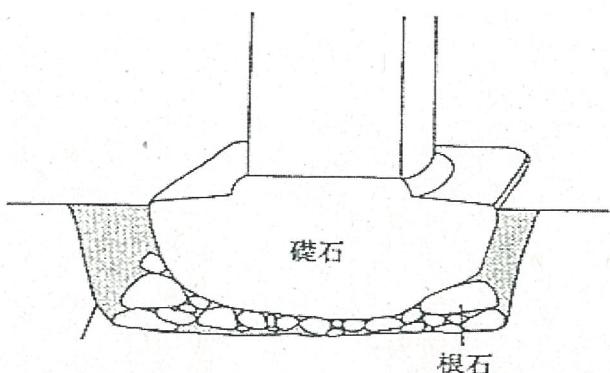
祭祀に伴う寺町焼(名須川町)の卸皿(おろしざら)と瀬戸焼(愛知県)の茶碗の出土状況



鶴紋が描かれた伊万里焼(佐賀県)の茶碗

- | | |
|--------------------|--------------|
| ①層 表土 | 昭和 40 年代～現在 |
| ②層 盛土(黄褐色土) | 昭和 40 年代公園整備 |
| ③層 旧表土(黒褐色土) | 明治期～昭和 30 年 |
| ④層 盛土(黒色土と黄褐色土) | 明治期～昭和 30 年 |
| ⑤層 盛土又は表土(礫混りの黒色土) | 江戸～明治期 |
| ⑥層 表土(黒色土) | 江戸時代 |
| ⑦層 整地土(褐灰色混合土) | 江戸時代(検出面) |

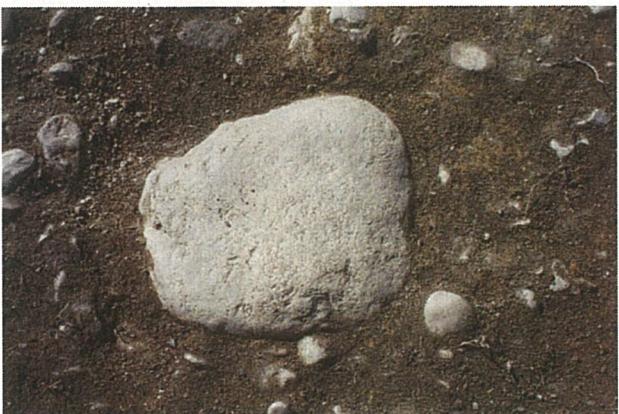
第 41 次調査の基本層序



礎石・根石と柱との関係



掘立柱の掘方と柱痕跡(A期・第 41 次調査)



整地層に伴う礎石(B期・第 41 次調査)



礎石に伴う根石(C・D期・第 41 次調査)



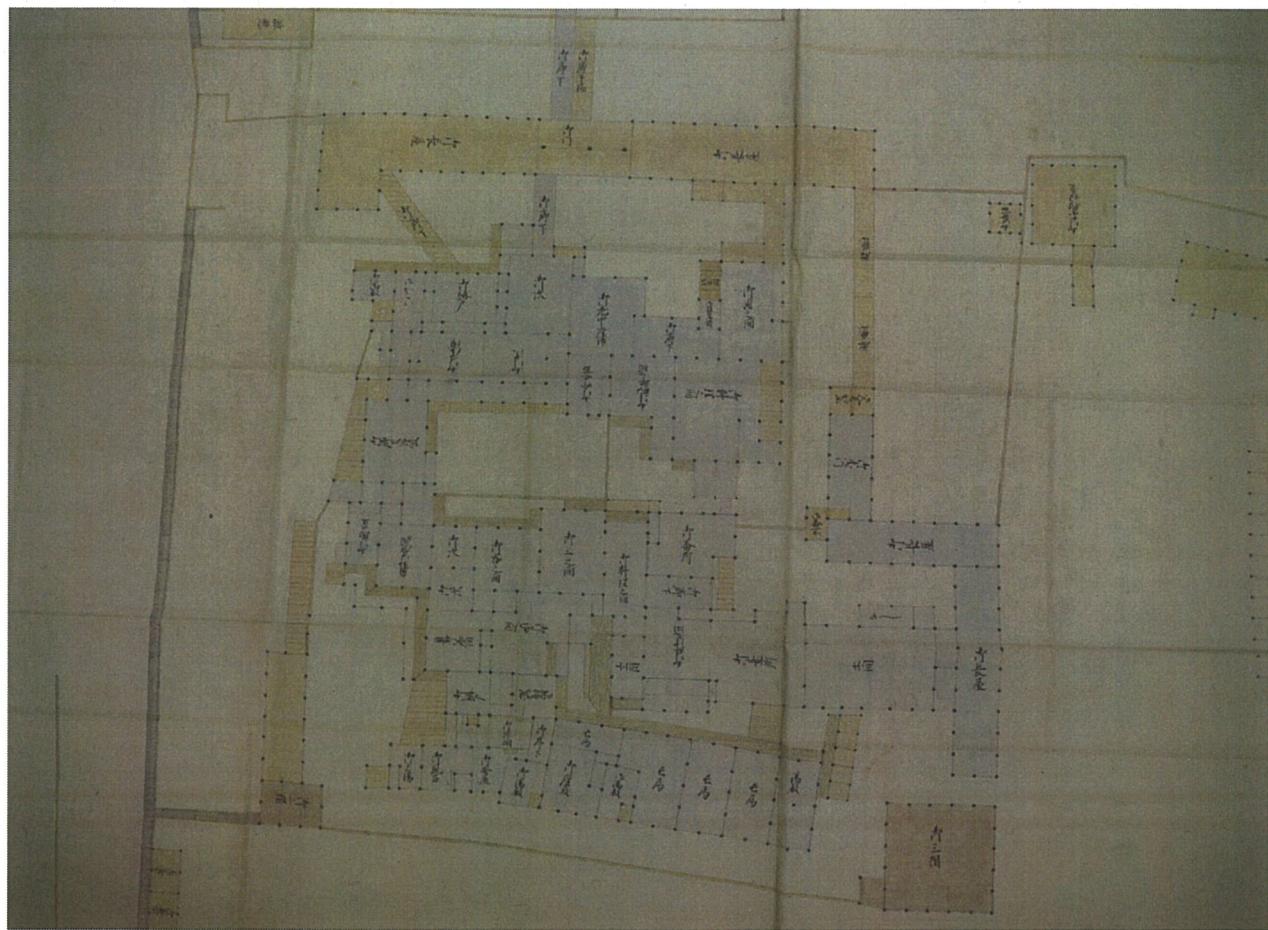
根石の断割状況(D期・第 41 次調査)



参考：明治期以降の四阿礎石(40 次調査)



参考：天守台西側下の瓦出土状況(40 次調査)



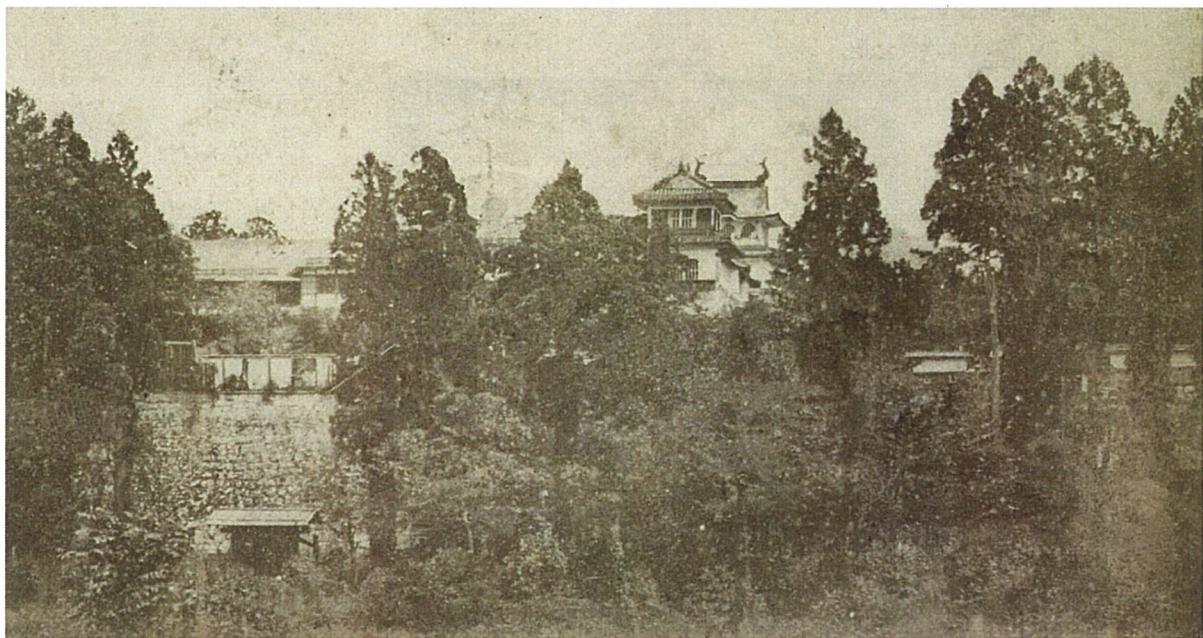
「御城大絵図」部分(江戸時代中期・もりおか歴史文化館蔵)



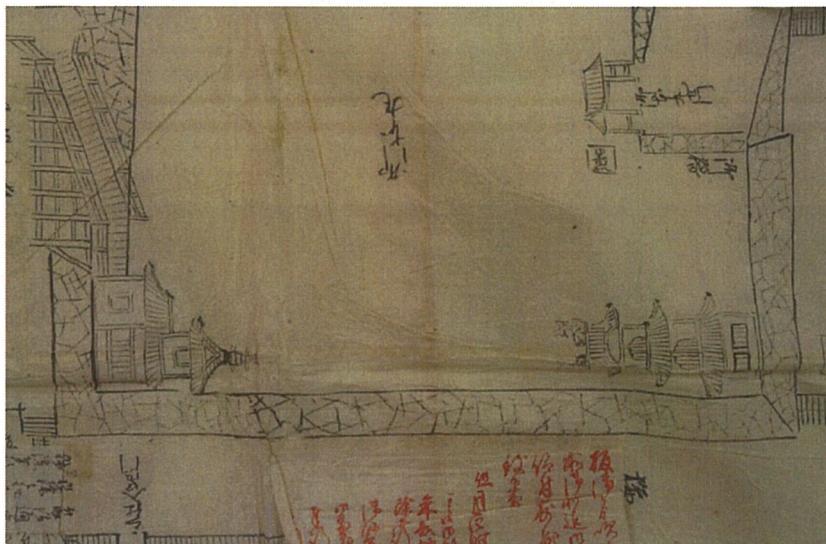
「靈承院様御代大奥御住居図」部分(江戸時代後期・岩手県立図書館蔵)



「盛岡城本丸二ノ丸建物平面図」（江戸時代後期・もりおか歴史文化館蔵）



盛岡城古写真(明治初期 個人蔵)

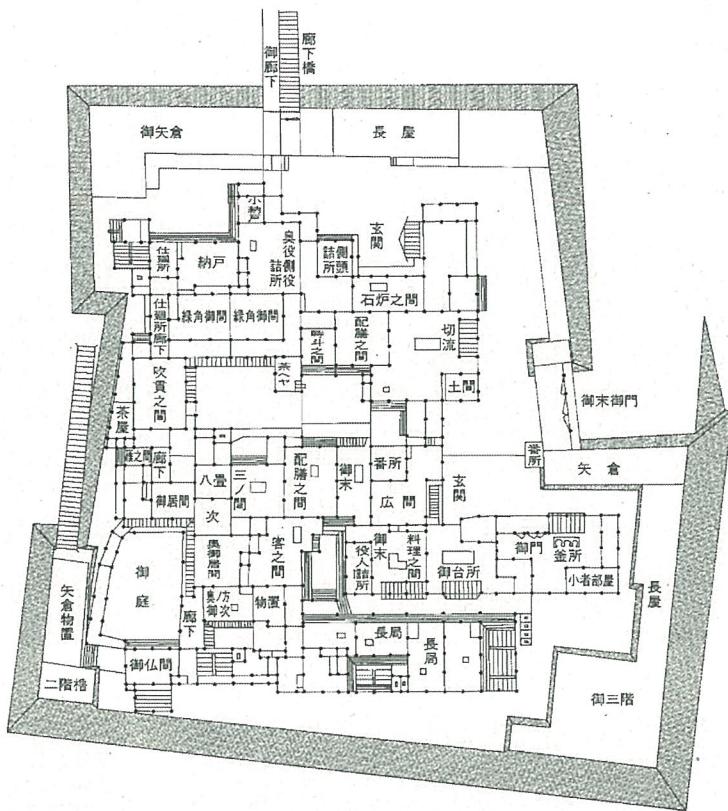


「盛岡城之図」本丸大奥部分(江戸時代後期・もりおか歴史文化館蔵) 「大奥女中面附帳」(もりおか歴史文化館蔵)

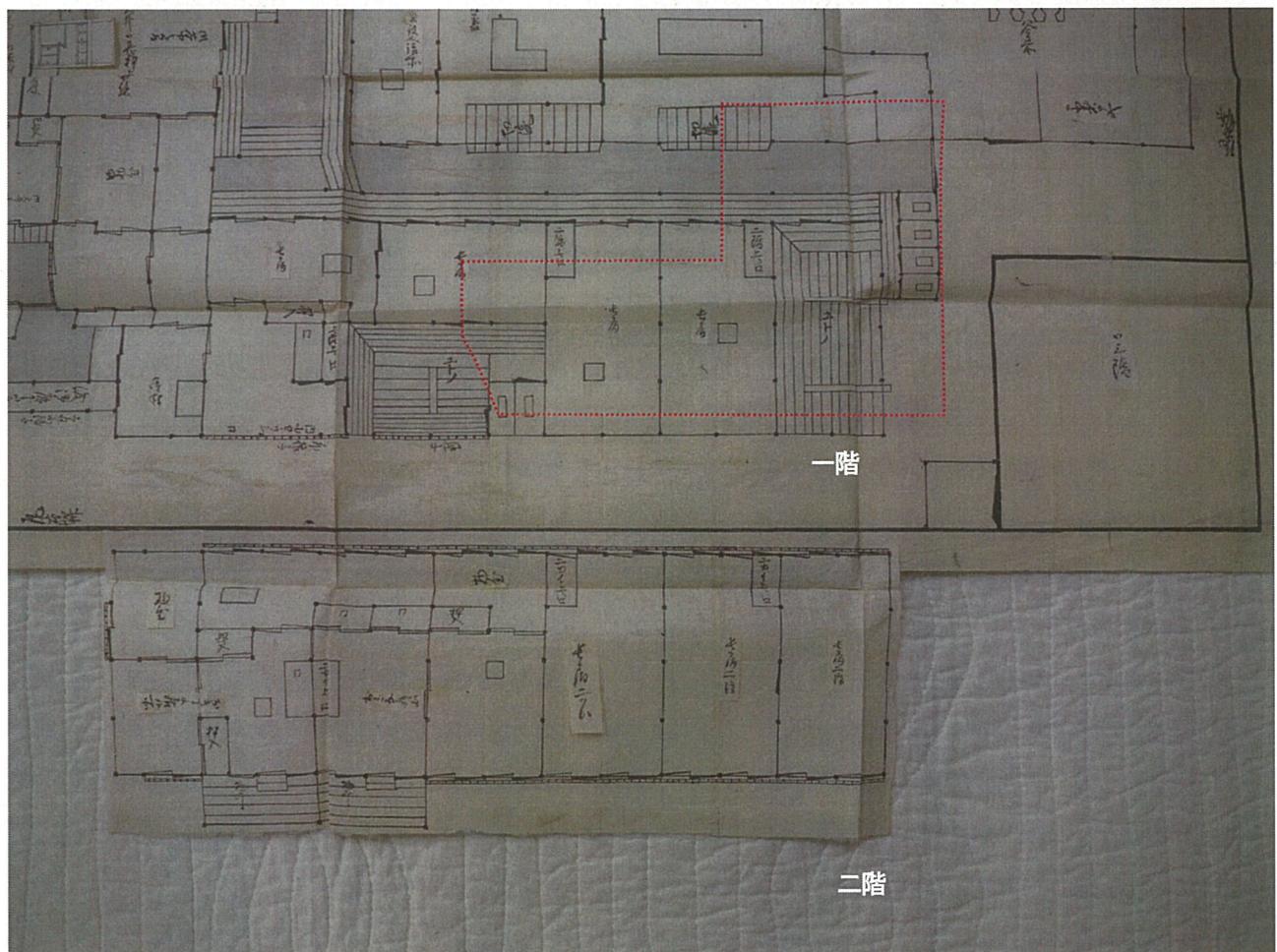
● 盛岡城大奥の職制（嘉永元年～明治4年）

- ・御老女(大年寄)=大奥の取仕切総括。奥の老中相当職
- ・御休息詰=女性客が大奥を来訪した際の接待。
- ・御小姓=藩主の身の回りの世話。
- ・御使番=御殿の御鍵口の開閉を管理。
- ・御三之間=大奥の三之間以上の部屋の清掃。
- ・午前様御附女中=藩主の身の回り世話役。
- ・永姫様差向女中:長姫の名は「永」。第13代藩主利済の父利謹の娘のお相手(最後の任命は明治4年7月25日付)。
- ・成姫様御住居女中:成姫の名は「成子」。第13代藩主利済の五女の住居(屋敷か)付
- ・御末・揚ヶ札=不明。※このほか石間御殿(現:岩手県庁広小路御殿か)も大奥が管轄していた。

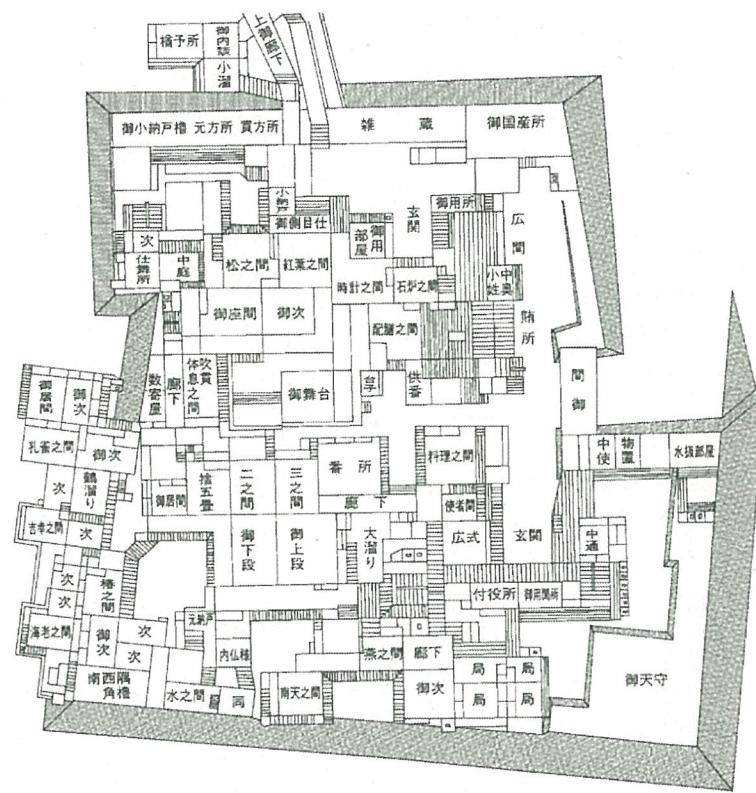
「大奥女中面附帳」弘化5年(嘉永元(1848)年)から



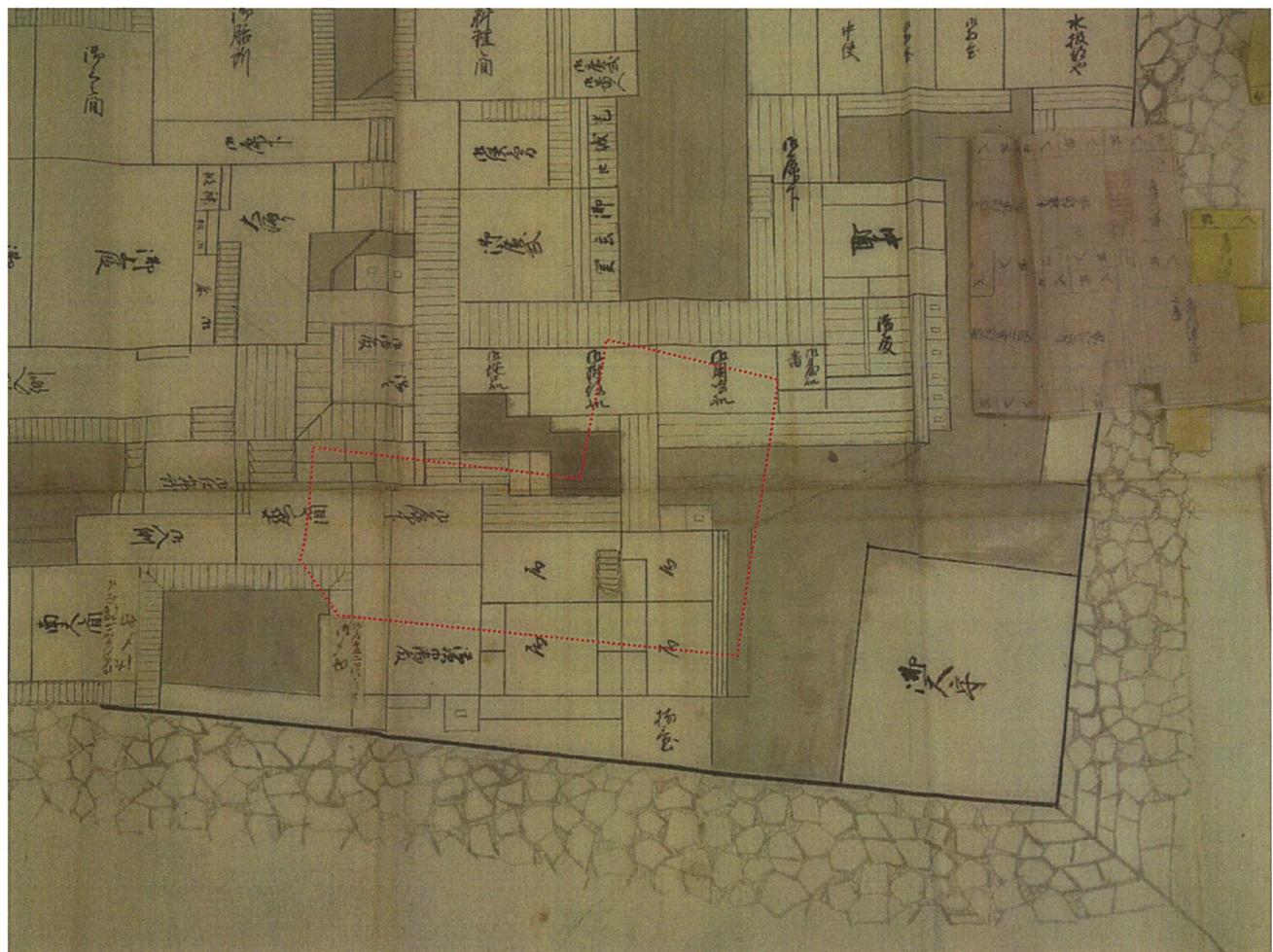
「盛岡城本丸建物平面図」概略(江戸時代中期)



「盛岡城本丸建物平面図」部分(朱線は調査区の概略・もりおか歴史文化館蔵)



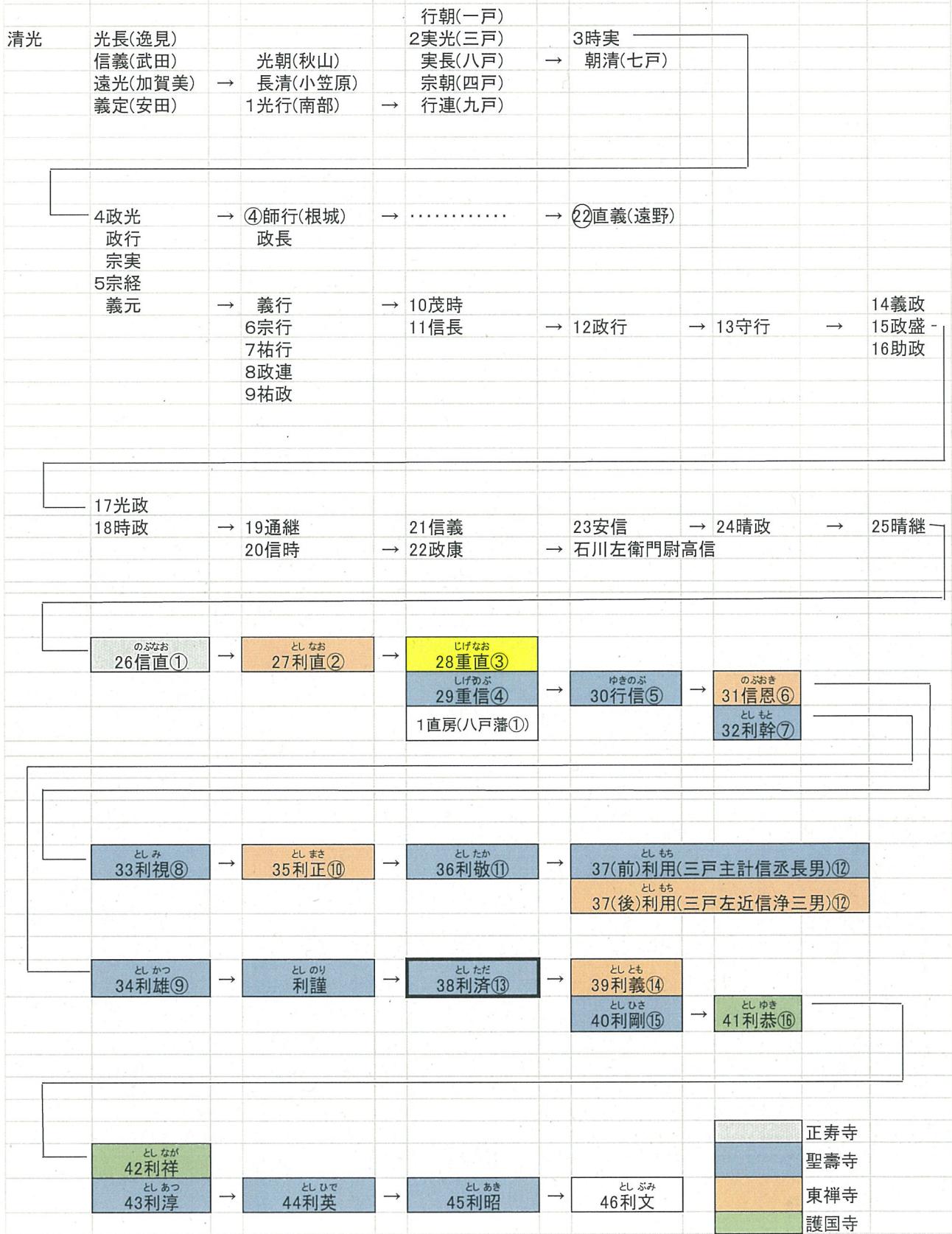
「靈承院様御代大奥御住居図」概略(江戸時代後期)



「靈承院様御代大奥御住居図」部分(朱線は調査区の概略・岩手県立図書館蔵)

盛岡藩南部家系図

清和源氏新羅三郎義光子
武田義清孫遠光三男



氏名の前の数字は、南部家の歴代数。氏名の後の○囲みの数字は盛岡南部家の歴代数



「南部利濟画像」部分(もりおか歴史文化館蔵)



南部利濟の靈承殿(某所蔵)

南部利濟の略歴

南部家	藩主	氏名	受領名	号・字等	出自・婚家	幼名
38	13	南部利濟 (なんぶ としだ)	信濃守・侍 従・少将	鶴堂・子彦・舞鶴 亭・揚葩亭・静勝 斎・謹明堂・枝月 堂・楊翁	南部利謹長 男	源太丸・謹明・ 三戸修礼・信親 ノハル・利濟(文 政 8. 12. 16)~
誕生	家督	官位	結婚	死去	法号	墓所
寛政 9. 8. 29	文政 8.	文政 8. 12. 16 従 四位下・信濃守・ 文政 10. 12. 18 侍 従・天保 10. 12. 28 少将	文政 11. 4. 7	安政 2. 4. 14	靈承院	聖寿寺

盛岡城内施設の主な名称変更

施設名	創建~ 万治 2 (1659)年	寛永 11 (1634)年	延宝元 (1673)年	延宝 4 (1676)年	宝曆 12 (1762)年	文化 5 (1808)年	天保 13 (1842)年	嘉永 5 (1852)年 ~建物解体まで
三重矢倉	三重矢倉?	焼失か	三重矢倉	三階			天守	
二重矢倉		焼失か	二重矢倉	二階			二階	
御末門						本丸門		
大奥通用門					不明門	鵜住居門		鳩森門
彦御蔵脇門				長屋門				

※「史跡盛岡城跡整備基本計画」において、整備の基準とする年代を「内曲輪に配された各施設が機能していた廃城期(幕末～明治 7 年以前)の状態を大概の基準とする。」としています。

盛岡城・本丸関係記事(1)

和暦	西暦	主なできごと
天正10年	1582年	南部信直、三戸城主となる
天正18年	1590年	信直、秀吉から南部七郡を本領安堵される
天正19年	1591年	九戸合戦。浅野長政、信直に不来方への居城移転を勧めたとされる
慶長3年	1598年	盛岡藩初代藩主南部信直、醍醐の花見において築城許可を得たとされる
慶長14年	1609年	中津川に上ノ橋を架ける(同16年中ノ橋、同17年下ノ橋)
元和3年	1617年	盛岡城大修築開始。前田利家家臣の内堀伊豆頼式が奉行頭として指揮
元和5年	1619年	盛岡城修復成り、盛岡藩二代藩主利直福岡城から移る
寛永10年	1633年	三代藩主南部重直、盛岡城完成。盛岡城に入城。以後歴代藩主の居城
寛永11年	1634年	9月29日 本丸二重矢倉に落雷あり。本丸は灰燼に帰す。重直が福岡城に移る
寛永12年	1635年	12月 福岡城の殿舎を移築して一応の完成
寛永13年	1636年	再び本丸御殿から出火して全焼。以後本丸は放置。御新丸の建築移転を計画。用材は福岡城から調達
寛永18年	1641年	御新丸完成。本丸の機能を果たす
万治2年	1659年	三重矢倉の銚鑄造のため、釜師小泉仁左衛門を召抱
寛文3年	1663年	中ノ丸殿舎全焼。藩庁舎の機能を失う。寛文10年までには機能回復
寛文7年	1667年	3月26日付 御新丸居間前石垣組仰付
寛文7年	1667年	8月15日付 石垣石材、志和郡長岡から船で運搬記事
寛文7年	1667年	8月27日付 郡山城破却。用材を盛岡城に充て、本丸殿舎の機能回復を行う。翌4月完成
寛文9年	1669年	4代藩主重信が本丸に居城
延宝元年	1673年	5月21日 「三重矢倉、二重矢倉」の再建許可。北上川の切り回しの許可を幕府から受ける
延宝2年	1674年	4月20日 「三重矢倉、二階矢倉」再建にあたり、瀬戸瓦を発注(紫波町川原毛窯跡)。7月17日 二階矢倉施工開始
延宝3年	1675年	「御二階」再建。北上川の開削許可
延宝4年	1676年	6月29日 「御三階」棟上
延宝6年	1679年	郡山御殿取殿材木にて御末方普請
延宝8年	1680年	3月8日 本丸石垣築仰出
延宝9年	1681年	2月9日 本丸石垣築懸
天和元年	1682年	2月29日 二階下吹上門北側の石垣20間余崩壊、4月29日普請許可。8月25日 本丸西側の石垣修補仰付、8月25日同石垣修補着手
貞享3年	1686年	二ノ丸西側の石垣の完成。石垣に普請奉行銘
元禄16年	1703年	地震で崩壊した本丸・二ノ丸などの石垣11箇所の修補を幕府に願い出る

盛岡城・本丸関係記事(2)

和暦	西暦	主なできごと
宝永元年	1704年	地震にて本丸の壁と石垣が崩れ破損して藩主・諸役人共々御新丸に移る。大地震で本丸建物破損、石垣も崩れ藩主諸役人共々は御新丸に移る。吹上門脇の石垣に普請奉行銘
宝永2年	1705年	三ノ丸北西部北面の石垣修復完了。石垣に普請奉行銘。5月1日 二階櫓・車門の石垣修補について、幕府に願い出。7月1日 二階(櫓)・鳩門などの修補願出
宝永3年	1706年	3月3日 本丸石垣の修補のため、百足橋・二階(櫓)取り壊し
宝永4年	1707年	2月19日 本丸石垣・二階(櫓)の普請に着手
宝永5年	1708年	1月24日 大風により北(三階)櫓の鰐が吹き落ちて所々損す
宝永6年	1709年	7月4日 三階(櫓)鰐棟上。御新丸には能舞台が設けられる
享保4年	1719年	1月10日 本丸御末より出火
元文5年	1740年	本丸西北石垣・二ノ丸乾之方の石垣修補が許可。本丸三階(櫓)の葺瓦の普請着手
寛保3年	1743年	10月1日 本丸三階(櫓)の瓦修復完了
宝暦3年	1753年	6月18日 本丸百足橋下の菜園口の樹木に落雷
明和8年	1771年	三階(櫓)を改修
文化5年	1808年	2月25日 御末門を本丸門と呼び改める
天保13年	1842年	本丸「御三階」を「御天守」と呼び改める
弘化4年	1847年	本丸表居間を改築。中庭に(能)舞台が設けられる
安政元年	1854年	本丸御殿建物の整理
安政2年	1855年	本丸冠木門番所わきの石垣修復(江戸時代での石垣修復最終記事)
文久2年	1862年	本丸天守の普請完了
明治元年	1868年	12月 盛岡藩降伏。兵部省の所管となり、松本藩・松代藩の取り締まりとなる
明治2年	1869年	7月 盛岡に復帰、再び13万石の居城となり、二ノ丸の中ノ丸に盛岡藩庁が置かれる
明治3年	1870年	廢藩置県により盛岡県となる。中ノ丸に県庁が置かれ、10月には遠曲輪・外曲輪の外堀・土塁が払い下げられて埋め立てられる
明治4年	1871年	1月 全国的に廢藩置県が命じられる
明治5年	1872年	1月 岩手県となり、6月には陸軍省(兵部省明治5(1872)年2月に廃止)
明治7年	1874年	3月 本丸・二ノ丸・三ノ丸・その他建物、城内の樹木が払い下げられ陸軍省が管轄
明治22年	1889年	5月 南部家から陸軍省に対し、払い下げ依頼状(明治7年以降は荒廃地)
明治23年	1890年	3月 南部氏が国から有償で縁故払い下げを受ける
明治39年	1906年	9月 「盛岡城趾ニ造営シタル縣公園ハ巖手公園ト称シ本月十五日開園ス」
明治41年	1908年	9月 南部利祥伯爵銅像除幕式
昭和9年	1934年	12月 県から移管を受けた盛岡市が南部氏から敷地を買収して管理を行う
昭和12年	1937年	4月 国の史跡に指定される(文部省告示第212号)

史跡盛岡城跡第37次補足調査の概要

調査期間 令和2年5月18日～7月31日

調査位置 三ノ丸北西部 瓦門北袖石垣上面

調査目的 三ノ丸地区史跡整備に伴う事前調査

確認遺構 堀の本柱・控柱跡、焼土遺構、整地層、栗石

出土遺物 瓦、鉄製品、陶器、磁器、古銭

調査内容 第37次調査を実施した三ノ丸北西部北面の石垣は、石垣変位調査や目視観察で変位が大きいことが確認されています。三ノ丸北西部北面の石垣修復に伴って上層の遺構が影響を受けることから、事前に内部の栗石や盛土の状況等を確認するために実施しています。

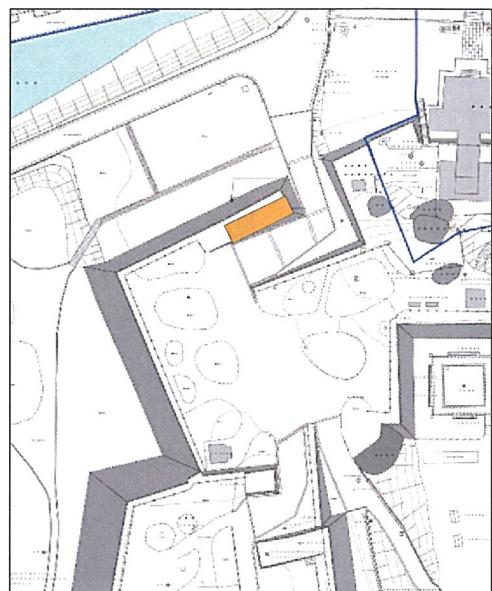
三ノ丸の石垣上下面是平成29年度に第37次調査として実施しており、今年度は瓦門北袖石垣の未調査部分を調査しました。平成29年度の調査において堀の控柱跡が盛岡城で初めて確認されました、今回の調査では新たに8口の控柱跡を確認しました。

元禄16(1706)年に発生した地震により、本丸・二ノ丸・三ノ丸などの石垣が被害を受けた古文書の記録にあります。三ノ丸北西部北面の石垣にある奉行銘石には、宝永2(1705)年に石垣の修復が行われたことが刻まれており、それに伴って石垣上部の堀も修復されたと考えられます。

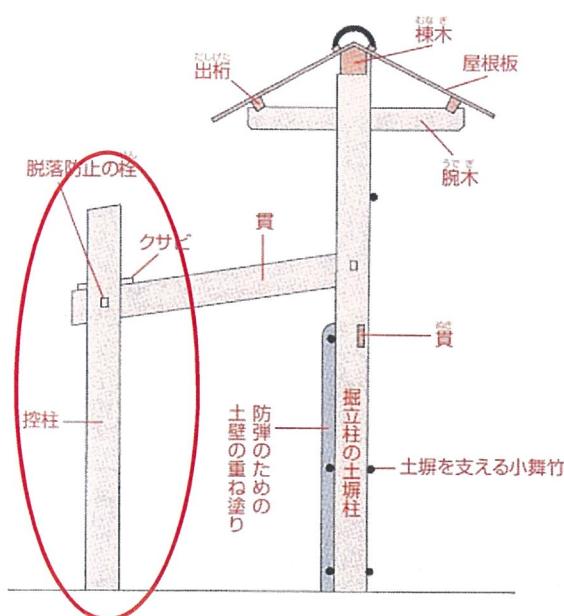
控柱は、堀の本柱の控えとして内側から支える柱であり、控柱跡はこの控柱を据えるための掘り方であり最も新しい時期の掘方には柱の痕跡も確認されています。

今回発見した控柱跡の変遷(新旧関係)から、宝永2年の修復後は少なくとも3回は堀が建替えられていることがわかりました。

石垣上部には栗石を敷き詰めた上に地固めされた層が存在し、地震等で屋根から落下して壊れた瓦礫となった瓦をさらに細かく割って敷き詰めた層も確認しました。また、割られた瓦は控柱の内部を充填したり、柱の底を安定させるための基礎盤にも使われています。いずれも柱を安定させるために使われていました。



第37次補足調査区位置図



土壠の骨組（広島城三ノ丸土壠古図）

土壠(どべい)

土壠は土の塊と想像されがちですが、中世以来多くの城の土壠は、木の骨組を持っていました。単純な土壠には、木の板で作った屋根が付き、また土壠の後方には、転倒防止のために控柱(支柱)が立てられていました。

近世になり、城郭の中心部が石垣で築かれるようになると、掘立柱であった中世の土壠の骨組は、石垣に応じて土台を持つように進化しました。



瓦を敷き詰めている層の検出状況



間隔をあけて検出された控柱跡



柱の基礎として使われていた瓦が入る控柱跡